

# 創造的な学びを促す社会科授業づくり

川 上 慎 一 郎 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

佐 伯 暁 仁 [鹿児島市立吉野中学校]

塩 入 俊 郎 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

外 園 舞 美 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Creating social studies classes that encourage creative learning

KAWAKAMI Shinichiro, SAEKI Akihito, SHIOIRI Toshiro and HOKAZONO Maimi

キーワード：社会科授業づくり、協働、トゥールミンモデル、パフォーマンス課題、社会参画

## 1. はじめに

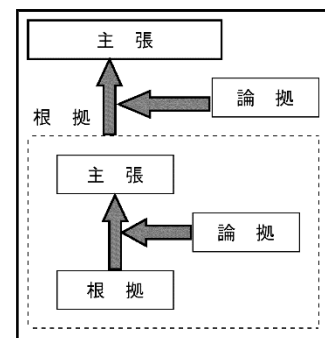
本校社会科では、平成24年度からの5年間で、「豊かで公正な社会認識をはぐくみ、主体的に社会の形成に参画する生徒の育成」を研究主題に掲げ、問題の解決を図る力を高めることを目的として、「創造的な学び」について研究を深めた。生きて働いていく上で、よりよく生きていく力となる社会的なものの見方・考え方を獲得し、これまで習得・活用してきた知識、概念や技能を用いて、よりよく「問題解決を図る力」を発揮し、将来的に「社会参画」していくことや、これまで習得・活用してきた知識、概念や技能を用いて、他者と協働して意思決定・価値分析・表現(提案)できる生徒を育成するために実践を重ねてきた。

そこで、本稿では「創造的な学びを促す社会科授業づくり」という主題のもと、主に協働的な学習や社会参画を促す工夫に着目して、創造的な学びを促す指導法を探ることにしたい。

## 2. 社会科における「創造的な学び」を促す手立て

### (1) トゥールミン・モデルを用いて、意思決定・価値分析・表現(提案)を行わせる指導の工夫

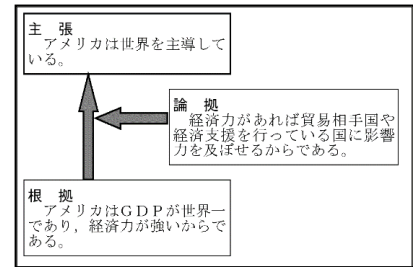
問題の解決を見だし、様々な角度から考えを拡げて新たな考えを出したり、自分の考えを表現し、よりよいものへまとめたりするために、本校社会科では、「創造的な学び」をさせる3つの活動を、分析哲学者S・トゥールミンの考え方(以下、トゥールミン・モデルと呼ぶ)に基づき、研究を進めてきた。



【図1 トゥールミン・モデル】

このトゥールミン・モデルとは、思考プロセスを整理・構造化し、論理的な思考を構築することと効果的な方法である。自己の主張をしたり、結論を出したり、または何らかの意見に対して反論したりする場合、自己の考えをより説得力のあるものとするためには、その考えの裏付けと

なるよう「根拠」を示す必要がある。社会科において、「根拠」とは、事実や現状などの社会的事実事象に当たる。「根拠」を出さずに主張ばかりしていても、その主張の妥当性は高まりにくい。つまり、「根拠」を出すことは、「その主張には何か具体的な証拠があるか」ということに対する答えとなる。



【図2 トゥールミン・モデルの例】

ただし、「根拠」だけを提示しても、それがなぜ主張と結びつくのか、はっきりしない場合がある。そこで、「主張」と「根拠」とを有機的に結びつけるものを、分析哲学者S・トゥールミンは、「論拠」と呼んでいる（図1）。これは、社会科において、理由付けに当たる部分である。これらの「根拠」と「論拠」とを生徒の学習活動の中で重視し、図式化（図2）することで、問題の解決を見いだし、様々な角度から考えを拡げて新たな考えを出したり、自分の考えを表現し、よりよいものへまとめたりすることができると考え、実践を積み重ねた。

## (2) 「社会参画」を意識したパフォーマンス課題の設定の工夫

本校社会科では、これまで思考プロセスを評価するための有効な方法として、パフォーマンス評価に取り組んできた。そして、このパフォーマンス評価を行うために設定される課題が、パフォーマンス課題であり、これは、「リアルな文脈において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題」のことである。このパフォーマンス課題を設定する際、「社会参画」を意識し、意思決定・価値分析・表現(提案)の場面を設定することで、問題の解決を図る力がはぐくまれると考えた。

「社会参画」を意識して、パフォーマンス課題を設定する際には「どのように、どのような」「なぜ、どうして」「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」という問いに対して、段階的に答えられるような活動が生まれる課題を選択する必要がある。また、できるだけ生徒が主体的に社会の形成に参画していくための活動につながるような表現(提案)活動にすべきである。表1は、パフォーマンス課題の例である。パフォーマンス課題は単元の内容に応じて、適切に設定する必要がある。

【表1 社会参画を意識したパフォーマンス課題の例】

社会参画を意識したパフォーマンス課題の例	
地理的分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>東京オリンピックでの観光客の受け入れについて考える</li> <li>鹿児島県民にとって、最適な北海道をめぐる修学旅行の企画を考える</li> <li>市長に、よりよい地域をつくるためのアドバイスを考える</li> <li>日本は経済に関して、どのような国をめざしていけばよいかを考える</li> </ul>
歴史的分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>中世から伝わる日本の伝統文化について考える</li> <li>明治新政府における予算配分について考える</li> <li>江戸時代の鎖国と開国のどちらを指示するか考える</li> <li>明治時代、日本はなぜ国際的地位を高めることができたのかを考える</li> </ul>
公民的分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>小型無人機(ドローン)を運用する際のルールについて考える</li> <li>実際の選挙を通して、各政党の公約について考える</li> <li>自分たちにもできる国際平和貢献プロジェクトを考える</li> <li>現代の政治をよりよくするため、どのようにしたらよいかを考える</li> </ul>

「社会参画」を意識したパフォーマンス課題に取り組ませることで、実際の社会に出た時に、生徒が直面する様々な問題を自ら解決していこうとする力もはぐくまれると考えた。より日常生活に根ざした取組により、生徒は、現代の社会を自分に引き寄せて考えられるようになるはずである。また、現在の社会に生きていることを自覚した上で、それを発展させるのは簡単ではないことにも気付くことができ、自分もこの社会の一員なのだという自覚をもたせるような機会を設定することができると思え、実践を重ねた。

### (3) 社会参画を意識した指導の工夫

本校社会科では、社会参画を意識して授業を行った際、オープンエンドになりがちであった主張を、トゥールミン・モデルを用いて、具体的な資料を基にして、より合理的な意思決定に近付けさせる必要があると考え、研究を進めた。具体的には、学習課題に関わる資料や図、新聞記事等を基にして、自分の主張を考察させた後、洞察の場面や単元末の時間において、社会における実際の取組や当時の政府が出した結論を、学習課題に対する答えの1つとして提示する(表2)。それらと生徒が考察した主張とを比較させることで、より合理的な意思決定に至らせることができた。また、現実の社会で起こっている出来事を題材として授業に取り入れる際には、新聞記事や数値データなどの具体的な資料を準備したり、現代社会と比較して当時の社会を見つめさせるために、当時の人々の立場に立って考えられる資料を準備したりすることで、より生徒自身の問

【表2 社会参画を意識した指導の例】

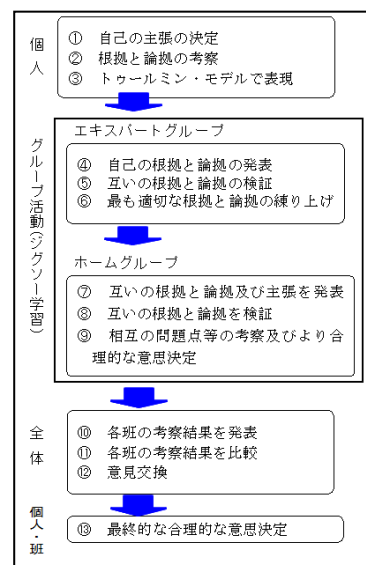
	社会参画を意識した指導の例
地理的分野	単元名：オセアニア州 オーストラリアが行うボートピープルに対する政策について、各国の難民への対応のちがいの資料を基にして、賛成か反対かを考察させた。
歴史的分野	単元名：明治政府の仕組み 明治初期における国内外の社会情勢等に関する資料を基にして、明治6年の予算配分を考えさせた。
公民的分野	単元名：内閣の仕組み 大きな政府と小さな政府のどちらが望ましいかについて、2014年に実施された第47回衆議院議員選挙の資料を基にして、単元全体を通して考察させた。

題としてとらえさせることができた。

### (4) 他者と協働して学習課題を追究させる指導の工夫

他者と協働して学習課題を追究させるために、本校社会科では、ジグソー法に取り組んだ。図3はその具体的な流れについて示しています。まず、学習課題に対して、生徒に複数の主張の中から自己の主張を決定(①)させ、その論拠を、価値を意識させながら考察させ(②)、トゥールミン・モデルで表現させる(③)。

次に、同じ主張の生徒同士でエキスパートグループをつくり、各自が考察した根拠や論拠を発表させる(④)。この場面では、各自の根拠や論拠の検証(⑤)や、主張に対して最も適切な根拠や論



【図3 ジグソー法の流れ】

拠の考察を行い、グループとして合理的な意思決定を行わせる(⑥)。

そして、今度は異なる主張の生徒同士(場合によって対立する主張の生徒同士)でホームグループをつくらせ、互いの主張を述べさせる(⑦)。そして、他者の主張から、自己の主張の問題点等に気づき、それを解決しながら、より合理的な意思決定を目指すために検証(⑧)を行わせ、そして、相互の問題点等を考慮した、よりよい意思決定を行わせる(⑨)。

さらに、個人での考察、同じ主張の生徒同士のエキスパートグループでの考察、異なる主張の生徒同士のホームグループでの考察という一連の活動を経て、次は学級全体で、各グループの考察結果を発表し合い(⑩)、比較させる(⑪)。そして、全体での意見交換(⑫)後にそれらの情報を基に学習課題について、最終的な意思決定を個人あるいは班で行わせる(⑬)。なお、⑨、⑫、⑬等で互いの主張をすり合わせるために、留保条件を出させる必要もある。

このように、「ジグソー法」を活用して、他者と協働して学習課題を追究させることにより、最初の意思決定・価値分析と比較して、生徒一人一人が社会的事象をより多面的・多角的に考察できるようになると考える。また、個人では見いだしにくい自己の主張の問題点に気づきやすくなる。さらに、異なる主張とのすり合わせにより、互いの主張の問題点等を考慮して、最終的により合理的な意思決定をすることができるようになった。現代社会における答えの見えない課題について、他者の主張を批判するだけではなく、他者と協働して考察させることによって、社会的事象を多面的・多角的にとらえさせ、自己の考えの変容に気付かせることができた。

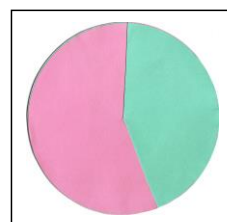
## (5) 社会科における傾聴に重点を置いた指導の工夫

「ジグソー法」では、活動のグループが「ホーム」→「エキスパート」→「ホーム」という手順で学習活動を展開していくため、多くの時間が必要になる。そこで、他者と協働して学習課題を追究させるために、『傾聴』に着目し、他者の主張に傾聴させ、互いの主張の折り合いを見出させたり、自己の主張の変容を見とらせたりするために、「意思表示カード」を用いた(図



【図4 意思表示カード使用の様子】

4・5)。個の主張の変容を見とったり、グループで1つの主張にまとめたりするために、また、ペアで1つの主張を見出すために意思表示カードを用いた。社会科における言語活動と関連付けながら、個、ペア、グループという形態の種類に応じて、意思表示カードを活用することで他者の主張を傾聴させながら、合理的な意思決定に至らせることができた。



【図5 意思表示カード】

## 3. 社会科における「創造的な学び」の実際

### (1) 実践例「1年地理的分野ヨーロッパ州」

### (2) 「創造的な学び」を促す手立て

ア 事実分析から価値分析のためのトゥールミン・モデルを使用させることで、思考の幅を広げるような視点を与え、活動の流れを視覚化させる。

イ 生徒が単元を通して獲得した知を用いてパフォーマンス課題に取り組み、社会参画の視点でE Uが解決していくべき課題について、自己の考えをまとめることで、生徒の思考力・表現力・判断力を高めさせる。

ウ イギリスのE U離脱によって議論が進められているE Uが解決していくべき課題を考察させることで、現代社会における社会的事象について関心を高めさせるとともに、よりよいヨーロッパの在り方について自己の考えをもたせる。

### (3) 指導計画作成上の工夫

国家統合、文化の多様性に関わる課題を捉えることができるよう単元計画を入れ替えた。E Uの空間的な広がり、E U統合の歴史的背景、E U統合がもたらす成果と課題などを地域の人々の生活と関連づけて多面的・多角的に考察して、国家間の結び付きに関わる一般的課題とE Uにおける地域特有の課題を捉える単元計画となるよう工夫した。

【表3 単元の指導計画】

時間	学習内容
1	ヨーロッパ州が統合を進めた理由と影響について、工業、人、物の移動の視点から資料をもとに考察する。E Uが設立された歴史的背景や政治・経済の統合について調べ、E U統合に関する意欲・関心を高める。
2	ヨーロッパ州の雨温図、統計・写真資料から、自然環境や農林水産業の特色をとらえる。トゥールミン・モデルを用いて自分が捉えるE Uの産業に関する課題を様々な資料も根拠に図式化する。
3	言語や宗教の共通性等のヨーロッパ州が統合を進めることができた背景を理解し、移民受け入れの問題点を把握する。トゥールミン・モデルを用いて自分が捉えるE Uの文化・人々の生活に関する課題を様々な資料も根拠に図式化する。
4	E U構成国内における経済格差の現状を理解し、E Uが抱える課題を様々な資料から読み取り、まとめる。トゥールミン・モデルを用いて自分が捉えるE Uの経済格差・貿易に関する課題を様々な資料を根拠に図式化する。
5	イギリスのE U離脱問題について、そのメリット・デメリットを資料を基に考察し、まとめる。ジグソー学習を用いて、エキスパートグループで詳しく調べ、ホームの戻り、イギリスのE U離脱について賛成か反対かを意思表示する。
6 (本時)	今後、E Uが解決すべき課題について、様々な資料を基に、自己の主張として論述する。これまでの学習内容を基にして、これからのE Uが解決すべき課題を自分の主張として論述する。

## (4) 本時の実際

【表4 本時の実際の流れ】

本時のねらい		イギリスのEU離脱のメリット・デメリットについて他者とともに意欲的に追求し、他者と協働して、互いの主張や根拠を検証しながら、EUが解決すべき課題を考察し、適切に表現させる。	
過程	時間	学習活動	教師の指導
導入	5分	1 前時までの学習内容を振り返り、パフォーマンス課題を設定する。	1 ワークシートを基に、これまで学習してきた、EUが抱える課題について振り返らせる。
		2 課題を確認する。 今後、EUはどのような課題を解決しなければならないのだろうか。	2 イギリスが離脱することにより、EUがどのような方向へ進むべきかについて関心を持たせ、学習課題を確認する。
展開	35分	3 各自で調べたメリット、デメリットを基に、イギリスのEU離脱について、賛成か反対か、自分の主張を班員に伝え、イギリスのEU離脱について考察する。	3 EU統合における、「離脱派のメリット、デメリット」「統合派のメリット、デメリット」を基に、それぞれの主張を論理的に説明させる。発表者は順番に起立して発表を行い、進捗状況がわかるように工夫する。
		4 グループでの話し合いを基に、EUの将来像を考えた上で課題を考察する。	4 話し合いによって気付いた点を基に、EUのよりよい将来を目指す上での課題について、自己の考えをまとめさせる。
		5 個人で考えたEUの課題をグループで共有し、他者が考えるEUの課題について考察する。	5 グループでの話し合いを基に、自己の主張(課題)に対して、新たな視点の根拠に気づかせたり、今ある根拠に新たな論拠を付け加えたりさせる。
		6 自己の考えを練り上げる。	6 グループや全体での周りの意見を参考にさせながら、最終的な自分の主張を文章でまとめさせる。
終末	10分	7 自分が考えたEUの課題と、EUが捉えている課題とを比較する。	7 「欧州の将来に関する白書」(ローマ宣言2017年3月)をスライドで紹介し、これからのEUの将来像を、EU委員会(加盟国首脳陣)がどのようにとらえているのかに気付かせ、社会参画への意識を高めさせる。



## (5) 本時の取組

## ア パフォーマンス課題の設定について

本単元では、A3サイズ1枚のワークシートを用いて授業を行いました。生徒は、毎時間ごとに、配布されたプリントや教科書・資料集の資料を根拠に、EUの課題についてトゥールミン・モデルを用いて図式化させた。本時では、導入でパフォーマンス課題「今後、EUはどのような課題を解決しなければならないか」を設定し、これまでまとめたワークシートの内容を根拠に、設定されたパフォーマンス課題に対する自分の考え（課題）とその理由（論拠）を文章で表現させた。

第1時でEU統合の理念を学習した後、第2時で農林水産業、第3時で移民・文化、第4時で経済格差について、EUの課題をトゥールミン・モデルを用いて図式化させた。

## 「ヨーロッパ州 ワークシート」 1年(4)組(50)番

イギリスはなぜEUを離脱したのだろうか。

第2時

課題 イギリスも、他国も、提議しないように、漁業のルールをつくること。

理由

内陸国が多いEU各国の水産業にとって、島国である英国のEEZへのアクセスは大きな意味を持っているので、英国のEU離脱後のアクセス権の維持に強い懸念を抱いているから。

根拠(資料の番号等)

7, 8, 9

第3時

課題 その国の失業率をおさえるため、移民を減らすこと。(0にはしない、EUの意味をなくさないから)

理由

ヨーロッパ各国は移民数が増加するにつれて、移民に仕事をとり、失業率が高くなっているから。

根拠(資料の番号等)

14, 16, 17, 18

第4時

課題 経済格差をなくしていくこと。

理由

国の方が弱い所は、EUでない国と貿易をすることで、その国の産業を発展させることができるから。(富む物がないと貿易できないから)

根拠(資料の番号等)

21, 22

第5時・6時

	イギリスのEU離脱	EU統合
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>移民をへらすことにより失業率の増加を防ぎ、テロの抑制をする</li> <li>自国の水産資源を守る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>関税X・共通通貨ユーロ</li> <li>国境を簡単に通過できる</li> <li>自由にどこへでも働ける</li> <li>どこへでも会社がつくれる</li> <li>医師・弁護士がほかの国でも働く</li> <li>製品の基準、安全基準の統一</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>関税(EUとの貿易)</li> <li>ポンドの価値が下がる</li> <li>国外企業が撤退</li> <li>EUからの経済援助X</li> <li>ヨーロッパ地域からの移住が減ること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>死刑がなくなる</li> <li>テロリストが簡単に入ってくる</li> <li>移民に仕事をあげられる</li> <li>自由に政策を決められない</li> <li>自国の製品が守れない</li> </ul>

第5時・6時

パフォーマンス課題

今後EUはどのような課題を解決しなければならないか。

自分が考えるEUの課題

経済協力をしていくために、経済格差をなくし、平等な関係をもつこと。

EUは貿易が中心であり、それをなくして平等な関係をもてば、国

同士の小さな争いもなくなり、平和になるのではないか。

・イスラム教などの宗教差別をなくす。→平和になる

(移民が多く、色々な文化が入ってくる)

・EUのデメリットを解決していく。

ジグソー学習を用いて、エキスパートグループでイギリスのEU離脱とEU統合のメリット・デメリットをそれぞれ資料もとに調べ、ホームグループでイギリスのEU離脱について自分の意見を伝え合わせた。

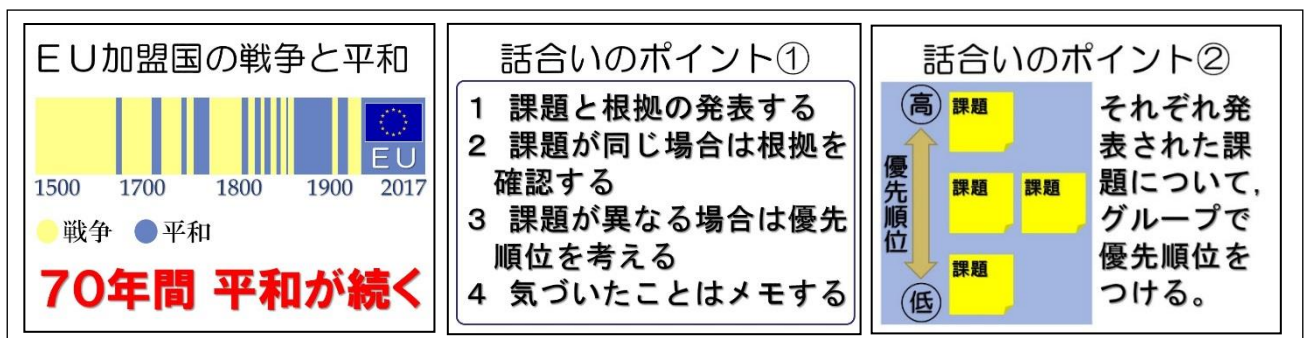
単元のまとめとして、トゥールミン・モデルの図式やジグソー学習の内容を根拠や論拠にして、パフォーマンス課題に対する自分の主張を文章で表現させた。

【図6 ワークシートの記入例】

## イ グループ内での対話を促す工夫

これまでの学習内容を踏まえて、「EU統合の理念であるヨーロッパの平和と繁栄を目指す上で、優先して解決すべきEUの課題」をワークシートに書かせた。その際、大事にさせたの

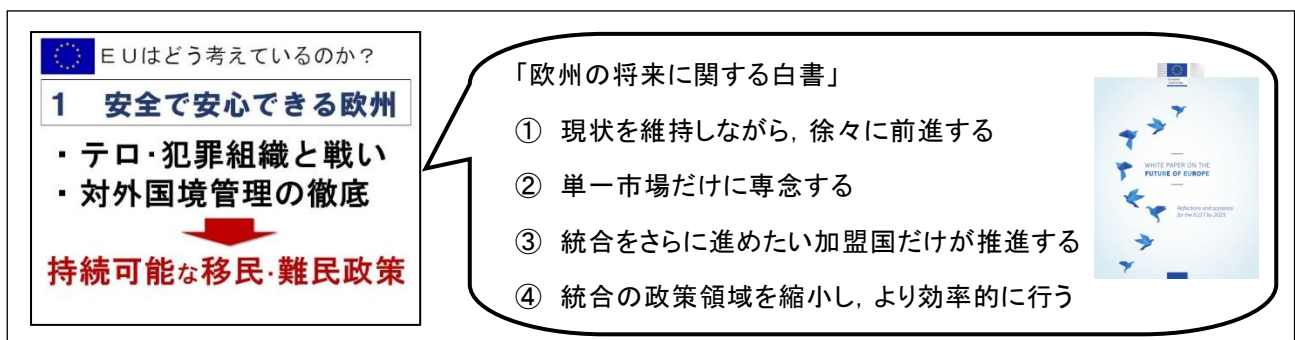
が、「理由」と「根拠」であり、なぜ、それを解決すべきなのか、その根拠になる資料は何かを明確に説明できるように記述させた。その後、各自で考えたEUの課題を、グループで共有させた。より充実した話し合いとなるように、自分が考えた課題を付箋に書いて貼り出し、その課題を根拠となる資料を示し、理由も説明しながら話し合わせた。そして、お互いの課題の共通した部分と、異なっている部分を確認し、もし、課題が共通している場合は、お互いがどのような根拠を基に課題を設定しているのかを確認させた。また、異なっている場合は、EU統合の理念を実現するために、どの課題が優先されるべきかを根拠をはっきりさせながらグループで話し合わせました。話し合いの中で、新たな理由や根拠に気付いたら、必ずメモをとっておくようにさせた。



【図7 対話を促すスライドの例】

#### ウ 社会参画を意識させる工夫

最後に、自分の主張を考察させた後、洞察の場面において、2017年3月に欧州委員会が発表した「欧州の将来に関する白書」を学習課題に対する答えの1つとして提示した。これは、社会参画を意識して授業を行った際、主張がオープンエンドになりがちなため、自分たちと世の中がつながっていることを意識させ、より生徒自身の問題としてとらえさせるためである。生徒たちは自分たちの出した課題と欧州委員会が考えている今後のEUの方向性に共通する要素があることに気付き、自分たちも国際社会の一員であると共に、自分たちの課題の捉えが現実社会でも求められていることを知ることで、自分たちの考えが社会に貢献できる可能性を感じることができた。



【図8 社会参画を意識させるスライドの例】

#### (6) 成果と課題

- ・ 思考力・判断力・表現力を高めるために、新学習指導要領にある「世界の各州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着



目して、それらの地域的特色と関連づけて多面的・多角的に考察し、表現する」授業を実践し、トゥールミン・モデルを利用して、課題を捉える授業スタイルを作ることができた。

- ・ 生徒が話し合いにおいて自分の考えを伝える際に、これまでの学習や資料が手元にあることで、根拠をもって説明することができ、自信をもって発言することができていた。
- ・ 意見交換を行ったり、自分の考えを深めたりする時間を十分に確保することにより、深い学びにつながった。
- ・ 少数意見や経験知が排除されてしまうことなく、合意形成がなされるための手立ても必要である。
- ・ 生徒は根拠や論拠を意識してはいるものの、それを視覚化・言語化して発表することが難しいようでした。そのため、明確に根拠を求めるなどの役割を果たせるリーダーの育成が必要です。
- ・ 今後の学習において、本単元で学習した地域統合、難民問題、経済格差などは、他の州においても共通の課題であることに気付かせることで、別の単元の理解を深められようようにしたい。

#### 4. おわりに

平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められている。本校社会科では、平成 24 年度から平成 29 年度までの 6 年間で「創造的な学び」を研究し実践を重ねてきた。トゥールミン・モデルを用いて、根拠と論拠を明確にして、思考の道筋を明らかにして議論を行ったことにより、個人の主張と他者の主張とを比較して、集団や社会への影響を考慮した「合理的な意思決定」を行うことができ、対話的な学習を実践できた。また、「社会参画」の視点でのパフォーマンス課題を設定することで、生徒たちに、授業で学んだことを日常の場面や地域・社会での問題の解決に生かすことができる、すなわち、社会参画につながると実感させ主体的な学習を実現できた。また、社会における実際の取組や当時の政府が出した結論を提示することで、オープンエンドになりがちであった主張を、より合理的な意思決定に近づけさせ、自分の考えと現実社会が結びつくことを生徒に実感させ、社会参画の資質をはぐくませることができた。今後は、この研究をさらに深めるとともに、日々の授業レベルに落とし込み、実践を積み重ねていきたい。

#### 引用及び参考文献

- ・ 社会認識教育学会編（2003）：社会科教育のニュー・パースペクティブ，明治図書
- ・ 社会認識教育学会編（2012）：新社会科教育学ハンドブック，明治図書
- ・ 片上宗二（2011）：「社会研究科」による社会科授業の革新—社会科教育の現在，過去，未来—，風間書房
- ・ 小原友行（2009）：「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン，明治図書
- ・ 唐木清志（2008）：子どもの社会参加と社会科教育 日本型サービス・ラーニングの構想，東洋館出版社

- ・藤原孝章編著 (2009) : 時事問題学習の理論と実践—国際理解・シティズンシップを育む社会科教育, 福村出版
- ・岡崎誠司 (2013) : 見方・考え方を成長させる社会科授業の創造, 風間書房
- ・吉村功太郎 (2003) : 論文『社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業』「社会科研究 第59号」
- ・佐長健司 (2006) : 論文『社会科授業における価値判断指導の検討』「社会科研究 第65号」
- ・西岡加名恵 (2015) : 「逆向き設計」で確かな学力を保障する, 明治図書
- ・西岡加名恵, 田中耕治 (2009) : 「活用する力」を育てる授業と評価, 学事出版
- ・北俊夫 (2015) : “知識の構造図”を生かす問題解決的な授業づくり, 明治図書
- ・G・Wiggins J・McTighe (2012) : 理解をもたらすカリキュラム設計, 日本標準
- ・Sue・Fostany・Young Robert・J・Wilson (2006) : 「主体的な学び」につなげる評価と学習方法, 東信堂